

◇文月の起源◇

『大野村史』(大正3)大字文月村には、「当村ハ南部高田村ヨリ與セト云フ者移住セルヲ濫觴(初め)ト云フ」としているが、年代などはわからない。地名は、海を渡って来た先住民が川を上り「舟着き」から転訛したとの説が有力だ。

文月の米作の歴史から考えると、寛文年間説(1661~72)、貞享2年説(1685)、元禄5年説(1692)の記録がある。

また大正7年(1918)に文月神社の杉を伐採し樹齢を調べたら、慶安3年(1650)に植えたと推定された。このことから大野村とそう違わない年代に拓けていたと考えられる。

宝暦8年(1758)の戸数は13~4で大野40、一ノ渡20に続いている。

◆こうしんづか庚申塚◆

庚申の夜、寝ないで徹夜する習俗があり、この夜眠ると三戸さんしよという虫が天帝にその人の悪事を報告する、という中国道教の説に由来する。その庚申は路傍に石塔にして祭って塞の神とした。

文月の庚申は文化9年(1812)の建立で大野では2番目に古い。12人の名が刻まれ、その1人高田吉右衛門は貞享2年に米作りをしたという吉右衛門の子孫である。

◎植林事業◎

大野に残る最も古い植林の記録は、嘉永4年(1851)に文月の高田吉松が杉1万5千本を植えたもので、郷土史家河野常吉は明治39年(1906)の調査で「文月こそ植林発祥の地である」といつている。

吉松の長男鉄三は文月神社の杉から種子を採取し、苗木を育て植林した。鉄三が安政2年(1855)から大正4年(1915)に至る61年間に植栽した樹数は60万本に達し、うち杉は46万本に及んだ。

大正7年(1918)、道庁が開道50年記念祝典を挙げるにあたり、拓殖功労者として大野村から故高田万次郎、藤田市五郎とともに、北海道の著名な植樹家故高田鉄三も選ばれている。

●屋号入り電話帳●

平成6年(1994)、文月町内会はユニークな屋号入り電話帳を作成した。

神社や水田発祥の地など地域の写真を載せ、地区内には高田姓、野田姓が多く日常生活では屋号で呼び合う事がしばしばで、「一(いち)」、「今(やま)」、「一(かね)」、「〇(まる)」等のマークを組み合わせ、姓名の前に付している。高田が34軒、野田が19軒、その他19軒、計79軒が載っている。

歴史散歩

旧 文月村

道道を上磯地区側から戸切地陣屋入口を通過すると間もなく旧文月村に入る。現在の道路はかなり直線化して様相が変わったが、右側が村内で左側が文月でほぼ区分けできる。

村内に水田発祥の碑、ライスターミナル、文月に道祖神、稲荷神社、文月分校跡、地藏堂、庚申塚が存在する。

庚申塚を過ぎると間もなく旧大野村(向野)に抜ける。



北海道水田発祥の碑

大野文化財保護研究会

問い合わせ 77-8535 (木下)

2011年8月